

# 国語科

## 「話すこと」の学習指導について

### —— 学習意欲を高めるための試み ——

米 山 誠

#### 1. 「話すこと」の指導の意義と問題点

59年度には、高3において「国語表現」の学習指導を実践した。<sup>(1)</sup>一年間、小論文・手紙・スピーチ等の指導を試みたが、その中で最も活気のある学習が展開されたのはスピーチのときであった。「人前で自分の意見や感想を話すことに興味・関心があるか」という調査を、スピーチの学習以前に行なったとき、「ある」と答えた生徒は25%であった。しかし、それがスピーチの学習以後の同じ調査では、ほぼ50%にのぼった。そして、「人前でスピーチをしたのは初めてだったが、よい勉強になった」、「スピーチをもっと授業にとり入れるとよい」、「型にはまらない本校らしい自由な表現の仕方を開発すべきだ」等々の感想・意見がかなり多数寄せられた。

学習指導要領には、中学・高校とも国語科の目標として、国語を正確・的確に理解し、表現する能力を身につけさせるべき旨がうたわれている。特に、中学1年の目標の(1)には、「自分の考えを大切にして正確に話したり文章を書いたりする能力を身につけさせるとともに、進んで表現する態度を育てる」と記されている。

しかしながら、実際問題として日本の国語科教育において「話すこと」は、「書くこと」に比べて軽視されているといつても不当ではない。高校においても中学においても、「話すこと」の指導が、積極的な姿勢で計画的に実践されているとは決して言えない。高3での「国語表現」の学習指導の経験から、「話すこと」・「聞くこと」を「書くこと」・「読むこと」に関連づけるような指導を早期に、高1の段階、さらに中1の段階から計画的に実施することが必要であり、それが理解・表現の能力を身につけさせるために効果的であると私は考える。また、読解中心で沈滞しがちな国語科の授業に「話すこと」を取り入れることが、生徒の学習意欲を高め、主体的な学習態度を養うことになるとも考える。

こうして、60年度には、中1の学習指導計画の中にスピーチを取り入れ、2学期及び3学期に、それを実施した。本稿は主として、そのスピーチ学習の実態について述べたものである。

#### 2. 「話すこと」に対する生徒の意識

日本人は全般的に勝手なおしゃべりはできるが、人前でのきちんとまとまった話はできないと言われる。生徒たちの日常的な言語活動を見ていると、仲間同士のおしゃべりは実際に活発だが、改まった場合、まともに話せないことが多い。また同時に、人の話を静かに集中して聞くことができないという傾向も目立つ。

さて、「話すこと」「書くこと」「聞くこと」「読むこと」のそれぞれに対して、中学生、高校生、大学生はどの程度、興味・関心をもっているのであろうか。次の資料は名大教育学部附属中学・高校の生徒及び名大文学部及び教育学部の学生を対象として行ったアンケート調査の結果を簡略化してまとめたものである。

##### ○調査の対象

- ・中学生258名（1年生86・2年生88・3年生84）
- ・高校生376名（1年生128・2年生130・3年生118）

（中学生・高校生とも男女比はほぼ同数）

- ・大学生35名（男子11・女子24）

##### ○調査の時期

- ・59年10月～11月

##### ○アンケートの質問事項

- 「あなたは次の言語活動のそれについて、どの程度、興味・関心・意欲がありますか、『感想や意見を人前で話すこと』、『文章を書くこと』、『人の話を聞くこと』、『文章を読むこと』、」
- 「日常の言語活動において困ること・悩むことがありますか。」

##### ○調査の結果

中学生（1～3年）	話す	書く	聞く	読む
非常に強い・かなり強い	13%	24%	43%	50%
あまりない・ほとんどない	56	39	14	22
どちらともいえない	31	37	43	28

高校生（1～3年）	話す	書く	聞く	読む
非常に強い・かなり強い	19%	37%	50%	56%
あまりない・ほとんどない	49	27	12	16
どちらともいえない	32	36	38	28

大学生（3・4年）	話す	書く	聞く	読む
非常に強い。かなり強い	40%	48%	68%	89%
あまりない。ほとんどない	37	6	6	8
どちらともいえない	23	46	26	3

上の表によって、興味・関心の高い方から順序をつけると、1位「読むこと」、2位「聞くこと」、3位「書くこと」、4位「話すこと」となることが一目瞭然である。しかも、「話すこと」に対する、興味・関心の低さは際立っているといつてもよい。

次に、「日常の言語活動において困ること、悩むこと」として挙げられた答えの中では、中・高とも「話すこと」に関するものが圧倒的に多い。「人前に出ると緊張して、自分でしゃべっていることがわからなくなる。」（中1女）、「頭の中で考えていることがうまく口で表現できない」（中2男）、「思っていることとちがうことを言ってしまうことがある。」（中3男）、「意見、感想など何を話せばいいのかわからぬ。」（高1男）、「その場に応じての言葉の使い方がわからない。」（高2女）、「考えていることを簡潔にまとめて発表できない。」（高3男）等が代表的な例である。その他、人前で話すとき、「赤面する」、「汗ができる」、「早口になる」、「大きな声が出ない」、「敬語の使い方がわからない」、「名古屋弁がはずかしい」、「流行語がくせになってしまった。」、「ことばがどもる」等の困難点がいろいろと具体的に記されている。

ところで、NHKが1969年に、全国の16歳以上の男女から抽出した3,600人を対象として行った「日本人のことばに関する意識」という調査の資料<sup>(2)</sup>によると、「人前で平気で話せる」と答えた人は37%、また「人と議論をするのが好き」と答えた人は24%となっており、「話すこと」に対する日本人全般としての意識の傾向をうかがうことができる。こうしてみると、日本の国語教育の現場において、「話すこと」の指導がもっと積極的に試みられなければならないと思う。具体的な実践が重ね合わされていくことによって、よりよい指導の理論も構築していくはずである。

### 3. 中1におけるスピーチの学習指導

以下は、最初に記したように、私が59年度高3「国語表現」の指導での経験を生かして、60年度中1において試みたスピーチ指導のささやかな実践例である。

#### (1) 対象生徒 名大附属中学校1年生全員（2学級）

A組42名（男21・女21）

B組42名（男20・女22）

#### (2) 指導目標

○自分自身の感想や意見などを人前で話すことを体験

させ、主体性をもって話す能力、態度を身につけさせる。

○国語の学習、表現等に対する積極的な意欲を喚起する。

#### (3) 指導方法

① 中学生の身近な事柄や体験を題材とした作文の見本として、教科書中の生徒作品例及び、本校生徒の作文集中の作品例をとりあげ、ていねいに読ませる。そして題材の選び方、内容のまとめ方、具体的な表現の仕方等についてよく考えさせるとともに、表現への興味や意欲を起こさせる。

② スピーチの題材や内容はそれぞれ自由に決めさせる。各自にとってできるだけ身近な事柄や体験で、強く心を動かされたことをとりあげさせる。

③ スピーチの内容を1000字程度の原稿にまとめさせる。できるだけ授業時間中に書き上げさせるが、時間の足りなかった場合は家庭で完成させる。

④ 生徒全員、それぞれ順次教壇に立たせ、3分程度でスピーチさせる。原稿やメモは見てもよいが、単なる朗讀にならないようにさせる。音声（大きさ、速さ）、姿勢、制限時間等について注意する。

⑤ 人のスピーチを聞くときは、聞きながら、内容や表現についての要点や感想のメモをとらせる。そして、それぞれのスピーチごとに質疑応答を認める。

⑥ 司会と審査を生徒の手で行わせる。3人ずつ組んで担当するようにして、時間ごとに交代させ、全員にひとあたり司会と審査を経験させる。なお、審査の基準は学級ごとに生徒全員で考えさせ、教師が意見をまとめたうえ、決定する。

#### (4) 指導の過程

上記のような要領により、生徒全員のスピーチを2回、すなわち、第1回を2学期中に、第2回を3学期中に実施した。

＜第1回＞ 60年9月、教科書（教育出版）の表現教材「身のまわりを見つめて」という作文指導の説明文と、生徒作品の例文とを読んだ後、それらを参考にして、生徒各自の身近な経験や出来事、強く心を動かされたことを題材とした文章をまとめさせた。

内容を大まかに類別して、表題のみ列挙してみよう。

- 「篠島へ」、「恐ろしかった海の思い出」、「白馬でのキャンプ」、「四国への旅」、「横浜市」、「バンガローに泊った夜」○「夏休み中の部活」、「サッカー部」、「柔道部」、「バドミントン部」、「私とバトン」○「盆踊り」、「釣り」、「読書」、「映画」○「ぼくと昆虫」、「家のねこ」、「犬」、「うちのインコ」、「金魚」、「番犬スピッツ」、「月下美人」○「ぼくの歯」、「ぼくの住む町」、「私の悩み」、「私の将来」○「夜中の騒音公害」、「いやな思い出」

## 「話すこと」の学習指導について

いじめのことー」、「アフリカ難民の問題」、「中国残留孤児」、「阪神グーム」等である。

スピーチは、10月から12月にかけて、国語の授業時間毎週4時間のうち、1時間をそれに充て、毎週平均5名程度の割で実施した。そして、各クラスとも約10回で全員の分を終了した。

声が小さい、早口すぎる、内容にまとまりがない、だらだらしている、姿勢に落ち着きがない、等々の話し方が目立ったが、生徒たちはそれぞれの個性を発揮しながら意欲的にとりくんだと言ってよい。話す者も聞く者も毎週その時間を期待し、その時間は明るく生き生きしているように思われた。聞く態度は、話の内容や調子に応じて、興奮したり、沈黙することがあったが、それもある程度、止むを得ないと思った。

第1回スピーチに対する生徒たちの主な反省点をあげると次のものである。

- ① 「初めて経験だったので声が小さすぎた」、「緊張して声が余り出せなかった」、「言いたいことが思うように言えなかった」、「早口になってしまった」等。
- ② 「内容がまとまらなかった」、「原稿がしっかり書けなかった」、「何を書けばよいのかわからなかつた」、「内容が具体的でなかつた」、「内容が短かすぎた」等。
- ③ 「姿勢がわるくなつた」、「下を向いてしまつた」、「はずかしくてうつむいてた」、「原稿の棒読みになつた」、「原稿に頼りすぎた」等。
- ④ 「まあまあよくできたと思う」、「原稿を見ずに話せた」、「話が思ったよりよくまとまつた」、「よく内容を調べてまとめることができた」、「写真を使って説明したので、みんなにわかってもらえた」等。

〈第2回〉 61年1月、生徒たちの強い希望に従つて、再度行うこととした。「話すこと」に自信をつけさせることができるだろうと考えたのである。まず、教科書の表現教材「心に残ったできごと」という題の説明文と生徒作品の例文、そして本校生徒作文集から選んだ作品数編を読ませた後、それらを参考にして、第2回スピーチのための内容、題材を考えさせた。2学期の場合と同様、身近な問題で、心を動かされたことをとりあげて1000字程度の原稿にまとまるように指示した。生徒たちの選んだ題材は、冬休み中の体験談が多かった。第1回の場合のように、内容を類別のうえ、主な表題を列挙しておく。

○「正月のできごと」、「正月の遊び」、「もちつき」、「冬休み中の生活」、「百人一首」、「初詣で」、「大みそか」、「冬休みの反省」、「1985年を振り返って」、「将来の夢」等(24名)。

○「楽しかった東京旅行」、「松本の祖母の家へ行っ

たこと」、「三重から滋賀へ」、「勝浦への家族旅行」、「祖父の三回忌に飛行機で愛媛へ行ったこと」、「スキー旅行」、「スキー・キャンプ」等(23名)。

○「雷魚釣り」、「映画を観て」、「阪神タイガース」、「原爆の図展」、「フルート演奏に参加して」、「クラリネットの練習」等(15名)。

○「おばあちゃんのこと」、「死んだ祖父のこと」、「ぼくの友だち」、「保育園の子どもたち」、「先輩」、「小学校のクラス会」、「子ども会」等(16名)。

○「初めて犬を飼って」、「うちの犬ジョン」、「ペットのハムスター」、「セキセイインコ」等(8名)。

○「私の視力」、「好きな食べ物」、「帰国子女の問題」等(3名)。

なお、司会と審査を生徒たち3人ずつに担当させ、毎時間交代で全員に一度は経験させることにした。審査(評価)の基準としては、①内容、②音声(声量、抑揚、速さ等)③姿勢、④聞き手の反応、⑤時間の各観点について、a・b・cによる評価をつけ、さらに総合評価をA・B・Cで示すことにした。結果は、Aが28名(33%)、Bが46名(55%)、Cが10名(12%)という数字になった。

第2回スピーチの学習は1月から3月までの間に、6時間実施した。第1回のときに比べると、生徒は概して積極的で進行もスムーズであった。

次に第2回スピーチに対する生徒たちの感想をいくつか記しておきたい。

○「第1回よりなれたせいか、はきはき言えた」、「原稿が1回目に比べてよいものができた。1回目は音声が小さかったが、2回目は大きくなつてよかったと思う」、「今度はあがらず、落ち着けたことがよかった」、「前回とちがつて、みんなの方を見ながらしゃべれた」、「感情をこめて話したこと、みんなによかったと言われた」、「Aという評点をもらってうれしかった」

○「急いで原稿を書いたので、内容がまとまらなかつた」、「内容のまとまりがなく、だらだらした話になつてしまつた」、「原稿の中味をうすらおぼえにして大事な内容を忘れて、しどろもどろだった」、「原稿を見ずにやつたが、途中でうまく続けられなくなつた」

○「内容を具体的に話せた。しかし時間が気になり、原稿ばかり見ていたので、みんなの顔を見ることができなかつた。」、「誰もみていないと何もみなくてすらすらいえるけど、みんながみていて、シーンとしていたので、はずかしくて思わず、紙をみながら、みんなの方をみずに話してしまつた」、「一回目のときは原稿に頼ったので姿勢が悪かったけれど、音声はよかつたと思う。二回目は原稿をもたずにやつたが、口ごもったのがよくなかった。しかし、姿勢はよくなつた」

たはずだ」等。

第1回スピーチの感想としては、「あがってしまい、思うように話せなかった」、「内容がまとまらなかつた」等が大半であったが、第2回の場合は、「落ち着いて話せた」、「原稿の内容がよくまとまつた」等、前回より、話し方、内容ともに向上したことを自認する感想が半数を越えた。やはり繰返して体験させることの効果は大きいといえよう。

なお、資料として、スピーチの原稿の具体例を一編のみ紹介しておきたい。

### スキー旅行

中1B 安藤真由美

お正月の2日から5日まで、北志賀の小丸山へスキーに行ってきました。その時のこととくわしく話そうと思います。

2日の夜10時、夜行バスで出発し、乗り続けること、7時間半。着いたのは3日の朝、5時半。車内ではほとんど眠れず苦労しました。

ホテルに入り、着替えをして、いざゲレンデへ！ ホテルはスキー場の中腹にあるため、外へ出ると、すぐゲレンデになるわけです。スキーぐつをはき、板をつけ、ストックを持ち、さあ、滑るぞ！と思つたんですが、前に進みません。1年間やってないとだめなんです。少し滑るうちになれてきて、ズルッズルッとすべれるようになってきましたが………。さて、ちょっと言っておきますが、私は滑れます。まあ、ころばない程度にですが……。弟は、と言いますと、私と張り合うくらいには滑れるでしょう。父は言うことがありません。問題は母なのです。スキーは一度やったことがあるけど、なにせ十数年前の話。今じゃ、まるっきりの初心者。滑るというよりは落ちてくってほうがぴったりしてゐるんですから。滑っていても止まれないので、リフトから降りてくる人たちの中へ突っ込んで行ったりして、見てる私たちの方がハラハラさせられました。そんな母につきあって、一日目は一度も下まで降りず、リフトは一回も使いませんでした。2日目、午前中は、一回、父と、一回、友達と下まで滑って行きました。サーツと気持ちよく滑っていけるんですが、最後のところでどうしても止まってしまうのです。なぜか一番最後のところだけ、むちゃくちゃ急なんです。そのうえボコボコで、アイスバーンになっちゃってるんです。下手をすると、ものすごくスピードが出るし、ものすごくこわかったです。

午後はレクリエーション大会。タイムを計って

もらったり、ストックなしで滑っていって、下に置いてあるジュースを取ったりして遊んでいました。

そして夜。この夜は忘れられない思い出です。生まれてはじめてナイタースキーをやつた夜ですから……。屋間とちがつて、空いており、スピードを目一杯出して気持ちよく滑れました。ナイター設備はあまりよくなかったけれど、それでも雪がちらついて、少し霧がかかり、とってもきれいで、神秘的でした。

短かった2泊4日のスキーを楽しむことができました。

## 4. スピーチ学習及び 国語学習に関する生徒の意識

スピーチの学習を体験して、生徒たちは、はたしてどのような受け止め方をしたのか、また国語学習についての関心や意欲は高められたか等、生徒の意識を知るためにアンケートを行つた。以下の資料は、そのアンケートの結果である。

○アンケート実施の時期：3月18日

○対象生徒：中1全員84名（男子41名、女子43名）

A. 「スピーチに対し興味。関心がありますか。興味。関心の「ある」又「ない」の理由はどんなことですか。」

	男	女	計
大いにある	27%	12%	19%
かなりある	37	49	43
あまりない	12	14	13
まったくない	2	5	4
どちらともいえない	22	20	21

### <興味・関心のある理由>

- ① 「人の話を聞くことが好きだから」、「みんながそれぞれ違うことを発表し合い、42通りのスピーチが行われるので楽しい」、「人の体験談が楽しく聞ける」「みんなの暮らし、環境、考えなどいろいろなことがわかる」等33名。
- ② 「人前で文章を読むことや話すことがわりと好きだから」、「思っていることをみんなに聞いてもらえるから」、「自分の意見を思ったとおりに発表できるところがよい」、「人前で話す力を持つから」「将来役に立つから」、「文章を書く勉強になる」「自分の経験を書いてみんなに話したり、みんなの話を聞いたりするのはとても楽しい」、「聞く力がつくから」等21名

## 「話すこと」の学習指導について

- ③ 「審査があって評価されるのがいい」，「審査の結果がたのしい」等4名。

### <興味・関心のない理由>

- ① 「人前で話すのは苦手だから」，「あがってしまふから」，「人の話を聞くのは好きだが、話す方はきらい」，「文章を書くのは好きだし、思ったとおりのことが書けるけど、スピーチだと、人前で話すのがいやで、顔が赤くなり、緊張するから」等18名。
- ② 「話すための内容を考えるのが難しい」，「原稿を書くのが苦手だから」等4名。
- ③ 「声が聞こえないときがあるから」，「みんながさわがしくなりやすい」等3名。

- B. 「スピーチを経験して、むずかしいと思いましたかむずかしいと思ったのは、どんなことですか。」

	男	女	計
非常にむずかしい	10%	9%	10%
かなりむずかしい	34	47	40
あまりむずかしくない	27	21	24
全然むずかしくない	10	0	5
どちらともいえない	19	23	21

### <むずかしいと思った点>

- ① 「人前に出るとあがってしまう。あがると声が小さくなる」，「緊張して言葉を時々忘れてしまう」，「てれくさくて、何を言っていいのかわからなくなる」，「感じをこめて話さなければならない」等33名。
- ② 「みんなにわかりやすく楽しい文を書かなければいけないから」，「内容を具体的に書いたり、まとめたりすること」，「どんなことを話せばみんなに楽しんでもらえるか、とか、どんなしゃべり方をすればいいのか、よくわからなかった」等15名。
- ③ 「話すときの声の速さ、大きさが思うようにならない」，「聞いている人を見て話すことができないし、声がよく届かない」，「時間が短かすぎても、長すぎてもいけないので気にかかる」，「みんなの関心をどうひきつけるかということ」等14名。

- C. 「スピーチ学習の時間は、クラス全体として充実していたと思いますか。どんな点が“よかった”または“よくなかった”と思いますか。」

	男	女	計
非常に充実していた	15%	0%	7%
かなり充実していた	31	35	33
あまり充実していなかった	15	16	16
全然充実していなかった	0	0	0
どちらともいえない	39	49	44

### <よかったと思う点>

- 「クラス全体が熱心だった」，「大体みんな真剣に人の話を聞いていた」，「教科書の授業とスピーチとを分けてけじめをつけたのでよかった」，「明るい授業だった」，「話がいきいきしていた」，「一人一人の気持ちが伝わってきた」，「生徒が交代で審査をしたことがよかった」，「それぞれ内容が具体的でわかりやすかった」，「内容を自分で考えてよい文章が書けるようになった」，「みんなが、自分の思ったこと、考えたこと人の前で話せるようになった」，「話し方や姿勢がよくなかった」等36名。

### <よくなかった点>

- 「聞く人の態度がよくない」，「ふざける者がいた」「横から口を出す人がいる」，「静かなときとさわがしいときと全体の態度が変りやすい」，「おもしろい話をしたとき、みんなが笑ったりして、その話に熱中するけど、しらける話のときは全く無関心な人がいた」等32名。

- D. 「次の言語活動のそれぞれについて、どの程度興味がありますか，“感想や意見を人前で話すこと”，“感想や意見を文章に書くこと”，“人の意見や説明を聞くこと”，“人の意見や説明の文章を読むこと”」

	話す	書く	聞く	読む
非常に強い・かなり強い	13%	15%	53%	55%
あまりない・全然ない	51	48	9	12
どちらともいえない	36	37	38	33

- E. 「国語の学習に対して興味・関心がありますか。また、それは特にどんなことについてですか。」

	男	女	計
大いにある	15%	0%	7%
かなりある	36	28	32
あまりない	10	14	12
まったくない	5	2	4
どちらともいえない	34	56	45

### <興味・関心のあること>

- ① 「教科書の文章を読むこと」 35名
- ② 「漢字」 11名
- ③ 「スピーチ」 9名
- ④ 「その他」（文法、ことわざ、故事・成語） 6名

### <興味・関心のないこと>

- ① 漢字 18名
- ② 作文、感想文 5名
- ③ スピーチ 3名
- ④ 文章を読むこと 2名

## 5. 今後の課題

上記のように、学習中の状況からも、学習以後の意識調査の結果からも、生徒たちはスピーチの学習に対して、かなりの興味・関心をもっているものとみられる。アンケートの数字を見ると、「興味がある」生徒は、62%に及ぶ。「興味がない」生徒は17%に過ぎない。

ところが、同時に開いた「感想や意見を人前で話すこと」に対する興味・関心についてのアンケートの結果をみると、「興味がある」は13%、「興味がない」は51%である。なぜ、「人前で話すこと」には興味・関心の低い生徒たちが、学習としてのスピーチには高い興味・関心を持ち得たのであろうか。これは今回のスピーチの学習が単に「人前で話すこと」だけではなく、読むこと、書くこと、聞くこと、との関連学習になっていたからであると思われる。まず、スピーチの内容・題材を考えるのに適切な文章を読み、次に、それぞれの身近な事柄や体験を題材にした原稿を書く、そして学級の全員がお互いにスピーチをして、それを聞くという学習過程が生徒たちの興味や意欲を高めたと考えられるのである。

59年度高3、60年度中1において、スピーチの学習

指導を試みて、私が強く感じていることの一つは、国語科の学習指導の中で、もっと「話すこと」、「聞くこと」の指導を配慮する必要があるということである。中学・高校とも全学年にわたって、「話すこと」、「聞くこと」の面を指導計画の中にとり入れることが、生徒の学習意欲を高めるための有効な方法にもなりうると思うのである。

無論、そのためには、国語科の教師全員が協力して計画を練り、実践にとりくむ体制が必要である。さらに、教科としての学習を超えて、ホームルームや生徒会の活動として、全校的なスピーチ（弁論）大会、講演を聴く会など開催できれば一層すぐれた効果を挙げることができることであろう。現在、本校国語科としては、以上のような、スピーチをとり入れた全学年的な学習指導の実現をめざして、その構想を練りつつある段階である。

（注）

- (1) 拙稿「国語表現の学習指導」（『名古屋大学教育学部附属学校紀要第30集、1984年』）
- (2) NHKことば調査グループ編『日本人と話しことば』日本放送協会、1980